

二つの課題作品どちらにも、翻訳上の課題がたくさんあったが、応募者の方々がそれらを乗り越えてさまざまな独創的な解決を見つけ、終わりまで頑張られたことに感心する。そして、受賞者もそうでない人も、難しい課題を終えるまで頑張ったという経験自体によって、翻訳者としての力が増したと信じている。その意味で、本当は応募者の皆さんに賞を与えたい。

審査するとき、私が何を標準にするかといえば、二つの柱がある。一つは正確さ、もう一つは文体である。予備審査を通過し、入賞を競った応募者の場合、正確さにはあまり差がなかったもので、主に文体で決まった。原文から生き生きした英語に翻訳ができていないかどうかである。

翻訳は移植のようなものである。優しく大切に植え替えると、新しい場所からまた芽が出て伸びることができる。正確さはもちろん、その上で翻訳された言語でも伸びてゆくかどうか重要である。伸びてゆけば、いわゆる生きている作品になり、読者に感動を与えることができる。

では、どうすれば文体をよくできるか。文法などの問題ではない。英語の文体を磨くにはなるべくたくさんいろいろな良い文章を読むこと、そして自分も文章を書くことである。それによって、耳 (ear) すなわち微妙な言葉の選択、リズムと音についての感覚が伸びてゆく。翻訳者になるためには、起点言語と目標言語、両方を最大限に大事にしなければならない。

ダニエル・ハーンというイギリスの翻訳者は、翻訳をよくするため何をすればいいか聞かれたとき、こう言った。「読むことです。たくさん読み、丁寧に読むことです。うまく書かれている文章はどうしてうまいのか、うまくない文章はどこがうまくないのかを考え、それを表現できるようになることです。」

ジャーニーン・バイチマン